

# 低賃金でも夢はある

## タイの職業紹介に登録

1面から続く

日本の不景気は、タイのコ

ールセンターには追い風だ。

コスト削減を図る日本企業

の間で、日本国内から人件費

が安いタイにコールセンター

機能を移す動きが目立つ。そ

の受け皿となるのは、低賃金

でも仕事を求めてタイに渡っ

てくる日本人の若者たちだ。

バンコクには日系のコール

センターが4社ある。その一

つ、トランスコスモス・タイ

ランドには約1400人の日本

人が働いている。20〜30代が

中心だ。この2年間で取り扱

う業務量が2倍近く増えた。

「人手不足で、5000人ぐ

らいまで雇用が伸びる可能性

がある」と、村松龍仁社長は

話す。中国や東南アジアには

日系コールセンターが多い

が、中でもタイは入国や就労

の規制も緩やかなため職を求

める日本人が多く、現地で一

定規模の採用が見込めるメリ

ットがあるという。

日系コールセンターで働く

愛知県出身の男性(32)は19

99年に大学を卒業。スーパー

に正社員で勤めたが1年半

で体調を崩し退社した。

その後、契約社員でスーパ

ーで学びながら働いた。ガイ

ドマンのアルバイトやデー

タの入力や一般事務の派遣な

ど、12年近く非正規で働いた。

手取りは月25万円前後で、

生活は出来た。「このままで

いいかな」と思っていた。

しかし、派遣村を見て「結

局、要らなくなったら捨てら

れる存在だ」と思うようにな

る。

センターで働きながら現地

の職業紹介会社5社に登録

し、現地の日系企業の営業職

(月給5万〜7万、約15万

〜21万円)を目指している。

日系の職業紹介会社パソ

ネル・コンサルティング社に

登録する。90年代は10人ぐら

いだったが、日本での就職難も

あり、数年で急激に伸びた。

「3万が台でも、男女を問

わず働きに来るようになって

きた。日本とタイの垣根が低

くなった」と小田原靖社長。

中国地方出身のヒサトシ

さん(37)は今年9月にタイに

来て、職を探している。きつ

かには昨年末の年越し派遣村

だった。

都内のアパートでニュース

を見た。「自分も同じだ」と

思い、日比谷公園に駆けつけ

2日間、炊き出しや布団の運

搬を手伝った。

95年に上京、専門学校や大

学で学びながら働いた。ガイ

ドマンのアルバイトやデー

タの入力や一般事務の派遣な

ど、12年近く非正規で働いた。



繁華街の屋台で夕食のおでんを買う太田さん。50台(約150円)で十分な分量が買える。台北市



## 台湾留学 正社員めざす

台北市・中山駅の近くに日

本人向けの安宿「山田屋」が

ある。その居間で、常連客の

太田貴久さん(27)は経営者

のおでんをつつきながら談笑

していた。

5月から台北の語学教室で

台湾人に日本語を教えている

。時給は300台湾ドル(約

900円)、月に3万台湾ドル

(約9万円)の収入だ。「それ

で

も日本にいた時よりもいい

」2005年に私大を卒業。

小さな商社に入ったが転勤が

嫌で1カ月で辞めた。2社目

に入った大阪市の電気工事

社では、高所作業などがつら

かった。250万円の貯金が

できた07年5月、台湾の大学

に語学留学。08年10月に終

え、台湾で就職活動を開始。

米国籍の金融危機の直後だ

った。「毎日、履歴書を書き

まくったが全く駄目だった」

生活費を稼ぐため、08年末

に奈良県の実家に戻った。

日本も厳しかった。ようや

く見つけたアルバイトは時給

850円。携帯電話の液晶パ

ネルを組み立てる仕事だ。

工場では「在庫圧縮」が進

んでいた。数カ月で担当者

から「来週は仕事がありません

」と告げられた。

4月に台湾に戻り仕事探し

を再開。電子部品の日系企業

の正社員募集では面接まで進

んだが採用には至らず、契約

社員の日本語教師になった。

「日本に帰りたい。でも、

この不況では無理。日本で仕

事がなかったら怖いから」

仕事を求める日本人が年間

約3000人来社する人材会社

「テンプスタッフ台湾」(台

北市)の赤池真由美さんは、

「景気悪化で企業の募集が減

る一方、採用基準はよりシビ

アになっている」と話す。

台湾への留学は、派遣など

から安定した正社員の職に移

るためスキルアップを狙う30

歳前後の若者が多い。

大阪府で契約社員をしてい

た女性(30)もその一人だ。大

学で中国語を学ぶため、9月

に台湾に来た。

1999年に専門学校を出

た後、4年間のアルバイトを

経て、大阪の映画会社の契

約社員になった。1年更新で

月収は手取り17万〜20万円。

1年前に仲の良かった同僚

が辞めた。「何となく働いて

いても何も変わらない」。親

友の言葉が、自分の将来を考

えるきっかけになった。

勤務後、深夜までのアルバ

イトを始めた。1年で120

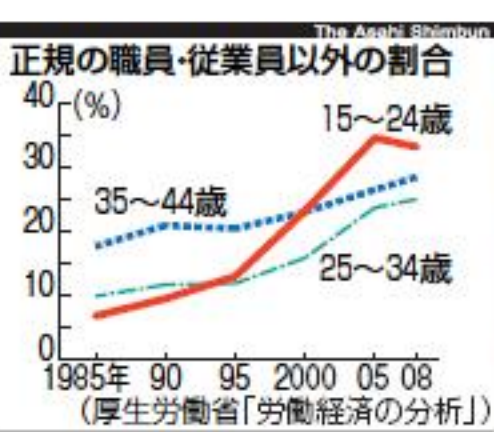
万円をためて台湾に来た。貯

金で暮らせる1年間で中国語

を勉強し、台湾か日本で正社

員としての就職を目指す。

## アジアに向かうロスジェネ



経済のグローバル化が進む中、国境を越えた労働力の移動も活発になっている。1990年代半ばから2000年代半ばまで、企業は新規採用を抑制した。「就職氷河期」「失われた10年」とも呼ばれる不況の影響で正社員になれなかったロスジェネレーションたちが、職を求めて海を渡り、働いている。海外で働きたい日本人に仕事を紹介する「パソナグローバル」(東京)には、約2万7千人が登録する。04年の登録者は約9千人だった。ここ数年、成長の著しい中

国や東南アジア諸国の人気が出ている。働き先の7割近くがアジア市場だ。不況の影響で海外支店を持つ日系企業は駐在員を廃止・削減し、代わりに現地に住んでいる日本人を採用する傾向が顕著だという。タイのバンコクには日本人向けフリーペーパーが20紙前後あり、タイに住む日本人の求人やカンボジアなどの隣国に一度出国して、ビザを更新するツアーの広告もある。タイ事情に詳しい旅行作家の下川裕治さんは「正確な把握は難しいが、30代前後のロスジェネだけで数千人はタイにいるとみられる」という。

一方、台北駐日経済文化代表処によると、台湾の日本人留学生は00年に1486人だったが、08年には2182人と増加傾向にある。こちらは安定した職に就くため、キャリアアップを図る若者が増えているという。

納得できる生き方を見つけたらなくなった。「40歳までに」。ネットで見つけたタイ。台湾留学 正社員めざす。台北市・中山駅の近くに日本人向けの安宿「山田屋」がある。その居間で、常連客の太田貴久さん(27)は経営者のおでんをつつきながら談笑していた。5月から台北の語学教室で台湾人に日本語を教えている。時給は300台湾ドル(約900円)、月に3万台湾ドル(約9万円)の収入だ。「それで